

牧区の歴史と大地

上越市 成島継紀

天智天皇の七年(六六八)越の国より、燃える土と水が越後から朝廷に献上されたとされている。その証拠は、どこにあるか？新潟県内各地にこれを裏付ける石油が開発されている。

その一つがこの牧区(旧牧村)である。伝説的な句碑でなく、昭和五十年代に発掘した宮口古墳群(牧区宮口)の調査によって明らかになった。なかでも、アスファルト塗土玉の出土と金銅装円頭太刀(こんどうそうえんとうたち)は当時の文化を裏付ける証拠と言われている。このような意義あるところを公園化したのが、宮口古墳公園である。

この度のツアー、そのプロローグをこの公園でご案内したのである。ここは飯田川に沿って信州へ峠越えをする牧峠は、今に残る「ひるこ道」(中世のころは「道」(みち)といい、近世になってからは

「街道」(かいどう)といった。)である。この街道沿いは、この地を語るには欠かせない文化と歴史のルーツである。そのいくつかを紹介してみたい。

一、日本の宝 宮口古墳群

高田からバスに乗って牧区に向かう途中、飯田川の谷口にさしかかると「島の橋」がある。ここが合併前の上越市と旧牧村との境である。

右手の小高い山は、ワインの父川上善人兵衛が開いた「岩の原ぶどう園」で、一生を葡萄の品種改良とワインづくりに捧げたところで余りにも有名。川をはさんで左前方に土まんじゅう型のいくつかの塚が眼にとまる。これが牧区が誇る宮口古墳群である。

この古墳群は群集墳(三十二基)としては日本の最北端にあるといわれ、石室

の構築などもしっかりしており中でも十一号墳からの遺物(死後に残したものは豊富である)。「秦繁沼」昭和五十一年に国の文化財に指定され「牧歴史民俗資料館」にその出土遺物が展示されている。



第11号墳 玄室と羨道部

二、鎌倉文化をつたえる男神・女神坐像

宮口線のバス、宮口下停留所で降り、街道から少し山道を登ったところに、小さなお社(おやしろ)三島社がある。ここに、写真のような見事な愛すべき男女一対の坐した木造の神像が安置されている。神像は、鎌倉時代中期の作風(平野団三)といわれる。

この両神像(県指定)は、気品あるこの地の歴史を今に伝える貴重な宝物である。

三、牧峠の今昔

昭和五十二年(一九七七)秋、上牧林道が開通したことによって、牧峠がふた

たび上越と信州を結ぶ交通路として見直されるようになった。夏の車の往来はめだつて長野ナンバーが多くなったことからもうなずける。それは海をもたない人たちの願いがかなえられたよろこびでもあろうか。

牧峠は、古くは尾子(ぶりこ)または蛭子(ひるこ)峠といつて旧牧村と長野県飯山市桑名川(旧下水内郡岡山村)に越える峠で、頂上は約九九〇メートルであるが、長野県側は比較的傾斜がゆるく、古くから重要な交通路だったことが、調査によって明らかになった。(新潟県史・牧村史)



男神・女神坐像

調査によれば、塩や日用品の運搬の多かったことがわかる。これらのことから上杉氏が川中島方面へ出陣する場合の重要な間道のひとつであったことも推測できる。上杉家に伝わる「越後の国絵図」慶長三年（一五九八）作といわれている資料が存在しております。

このように盛んであったこの峠も明治二十六年（一八九三）信越線が全通したことや国道の開通によって全くさびれてしまったが、いま又この地方の重要な路線として浮び上ったばかりでなく、観光資源として、牧区の顔として、陽の眼をみることになった。近時この峠は渡り鳥の駅として一躍有名になっている。

四、日本書紀とくそうず

この地の歴史や文化を語るとき、どうしてもかかせないものに「石油」がある。「くそうず」は、古くから言いならされた石油の呼称で「草水」または「草生水」、古くは「臭水」と書いた。

前段でもふれたが、「越国献燃土與燃水」（日本書紀）牧油田算出のものであるという説もある。何れにしてもこの地の牧の郷その生いたちや歴史を知る上でくそうずは大切な文化遺産なのである。（下昆子松野理所蔵）

五、明願寺は有線放送発祥の地

飯田川の右岸を四キロ、棚広橋を右に折れ原停留場に降りると古美をただよわす山門が眼にとまる。ここが浄土真宗明願寺（池水文雄住職、この山門は、近く映画化される「ふみ子の海」（市川信夫原作）の舞台ともなっており近時脚光を浴びている）。

その原点ともなった『光にむかつて咲け』の著者栗津キヨ（旧姓金井・岩波新書の生誕地という由縁の地でもある。ここは、ひる街道の要所に位置していることもあって、古くから常に新しい文化をとり入れてきた地域）。

先代住職の隆勝は、日本最初の有線放送創始者である。昭和七年（一九三二）当時としては最高級のビクター製八球スパー受信機を求め、ラジオ受信をはじめ有線で近所に音をどけたのが、日本最初の有線放送の開始であった。

教育史研究家の佐藤嘉市は「新潟県教育月報（No.三二六・昭和五十三・十一）の「視聴覚教育とはじめ」の中で、その功績をたたえている。

六、民話 雪太郎の里

今ごろの若いおおかあさんで、昔話の話をせる人が何人あるでしょうか。昔話というのは桃太郎や、かちかち山や花咲爺さんの話。いまは民話といいますが、わたくしの幼い頃「おばあちゃん、むかし

ばなし」。そう云って寝物語をねだったものです。

民話は、もともと空想的な「物語」の世界だといわれています。昔から農民たちが、みんなでのしむために、つくって、そだてて大切に語りつたえてきたものです。そこにはいろいろな意味や真実がこめられています。

「雪太郎」は、雪深いこの地方の農民のころから生れた物語のひとつです。湯の里深山荘の眼前に「長者屋敷」という平坦地があります。ここが民話雪太郎のこの地方の舞台なのかもしれません。

昔、深山のふもとに「髭の長者」という大金持ちが住んでいた。心のやさしい長者は人びとから神さまのように尊敬されていた。しかし長者は子宝に恵まれなかった。（後略）

名物の「雪太郎大根」は、この大地で生産、ブランド商品として東京にも出荷されている。

七、結びにかえて、伝承の燃える水

「耕して天頂に至る」といわれるように起伏に富んだ広範な地形、かつては五十有余の集落が点在していた。古代から多くの人たちが入り込んで栄えた。地下資源として豊富な油脈をもっていたことから、石油の起源についても「燃える不思議な水」の物語として、いくつか伝承さ

れている。（伝説省略）

天保元年（一八三〇）時の代官が、この収益に目をつけ、半年に七百五十文ずつお上に納めるよう申しつけられ、やがて積み出されるようになったという。明治に入って石油会社が続つて採油にかかり「石油の牧」が知られるようになり一時その黄金時代を築き上げたが、その後下火となり現在はその語り種にすぎない。再度この牧区にお訪ねいただき、側面から新しい文化、その再生に向けてご指導をいただければ幸いです。

参考（引用）資料

□牧村合併四〇周年記念誌「よみがえる心のふるさと牧村」（牧村史編さん室編集）

□「牧村史」牧村史編さん委員会（平成十年三月発行）

□広報「まきむら」「ふるさと散歩」（連載三三回 昭和五十三年七月（一九七八）から五十六年（一九八二）三月。（執筆 成島継紀）



成島継紀さん